

日本山岳会所蔵資料紹介 No.7

[資産番号] 00481～00500
 [資料名] 堀田弥一の遺品
 [部門名] 書簡、ネガフィルム
 [寄贈者] 立教山友会
 [受入日] 2011年4月



堀田弥一(1909～2011年)は、1936年、日本人初のヒマラヤ遠征「立教大学ヒマラヤ踏査隊」の隊長としてナンダ・コート(6867m)初登頂を成し遂げた。1954年には、日本山岳会第2次マナスル登山隊長を務めた。当会には、そのマナスル隊遠征に関するものが数多く寄贈されている。今号と次号にわたり、手紙、日記、ネガフィルムなどを紹介する。



高野鷹蔵が堀田に宛てた手紙



谷口現吉からの急を知らせる伝令



横から堀田に宛てた手紙

第2次マナスル隊登山隊長に任命された堀田に、高野鷹蔵は次のような手紙を寄せている。「私は日本山岳会発起人の一人で御座いますが……今年、マナスル遠征のお仕事を御願ひ申し上げます。……どうか万全のご配慮により無事御遂行を頂きます様、山岳人の老人として神かけて祈る次第で御座います」(昭和29年1月28日)。

期待を背負った登山隊だったが、サマ部落でアクシデントに遭遇、目標の山をマナスルからガネッシュ・ヒマールへと変更を強いられる。それは4月3日、谷口現吉からの「急」の伝令「数百のチベット人集結して我々のサマ入りを阻止せんとす」に始まり、数日間の緊迫した交渉が続けられた。堀田は、会長・横有恒へ報告すべく便を出している。そのとき、2人が交わした走り書きのような手紙から、一旦緩急あればとの切迫した様子が感じとれる。急の連絡は、まず竹節作太の電報、詳細は堀田からの航空便になろう。当時、日本への郵便は18日間ほどを要している。堀田から横へ(4月9日)「マナスル登山を放棄しなければならぬ……」と、その理由を5枚にわたり書いている。横からの返信(5月13日)「4月27日落手、マナスル登山中止はやむをえない……ただし、マナスルの将来に向け、サマに誤解を残して帰らぬよう……毎日新聞社において重役会が開かれ……」などと和紙に鉛筆で書いている。航空使用の薄紙に、時間をかけて書くことができなかったのだろう。

サマでのアクシデントの報告を受けた望月達夫、三田幸夫、成瀬岩雄、AACKなど……多くの岳人が、堀田に手紙を送っている。AACKの川喜田二郎は前年度ガネッシュ谷で調査研究をした経験から、詳細な情報を提供している。望月においては、「……村木・辰沼隊員は新しい領域に入って地名、山名、川名など調べ概念図でもスケッチマップでもいいから作るように」と指示している。

マナスル遠征は国を挙げての大プロジェクトであり、それに応え何としても登頂を成し遂げたいという日本山岳会の強い思いが伝わってくる。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jaashiryu102@jac.or.jp (資料映像委員会)

◆編集後記◆

●日本雪崩ネットワークは、日本山岳会とも縁がある。いくつかのサークル活動に講師として招いたり、また国内の雪崩事故の多くは、事故後なるべく早い時期に調査に入るの、そのような場でも接点のあった会員もいるようだ。

●「雪山で活動する方に雪崩についての正しい知識とマネジメント・スキルを普及させるため、研究者、山岳救助隊、スキーパトロール、山岳ガイドなど、雪崩に専門的に関わっている人々と連携し：雪崩を中心に置いた「円卓」をキークンセプトとし、「情報」という視点で活動を行っています」とサイトにある。この円卓というのが、とても重要なキーワードであり、解決の糸口、発展的展開への扉だと考える。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 822号

2013年(平成25年)11月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭
 編集人 柏 澄子
 E-メール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社